

学卒訓練生Kから指導方法を学ぶ(抄：1995年執筆)

竹内隆仁(元愛知県職業訓練指導員)

はじめに

本稿は、平成5年4月から平成6年3月まで1年間の学卒(中学校)訓練生Kを通して昨今取りざたされている訓練生の生活指導の問題点と今後の指導法を私なりに模索しながら修了式を迎えるまでをまとめたものである。(中略)

訓練生活は結論から述べると大変真面目な態度で受講でき、1年間の訓練時間数を無遅刻・無欠席勿論のこと早退も無く後期に至っては室長も勤め、私の秘書兼助手も完璧にこなすいわゆる秀才で職員室でも他科の指導員にも絶賛されるほどであった。(中略)

4. 登校拒否プロセス(K訓練生の場合)

私は、子供の頃から学校の職員室と言うところは一番苦手な場所だったせい、子供ごころに大人なっても先生だけには、なりたくあいなと思っていたので、訓練生からの全ての用件は、休憩中に個人的に一对一で話し合いの末お互いが理解し納得するまで話し合う様にしていた。(中略)

朝から学科の有る時は、時限毎に職員室に帰るが、実習のときは、全て訓練生と共にフルタイム生活することが私の指導員としての信念であり生きがいでもある。

「休憩は訓練生の心身のリフレッシュタイムで有り指導員の休憩ではない。」

「人間教育、指導方法の習得は生徒の中から生まれる。」

「教えることは教わることである。」との信念のもとに毎日を過ごしている。

或る日、新聞等で、報道していた登校拒否生徒のことが話題になった。その時の会話を再現してみることにする。

私：Kよ今日の新聞見たか？

が付くのでよいし、一年間だから休まないでおうとすれば出来そうですし、目標が近いからです。

K：新聞は見てきました。

私：あそうか。

私：足助町に「つげの高校」が出来たってな君知ってるか？

K：それに、先生は嘘を付かないし、怒らないし、それに、生徒を馬鹿にしない。

K：テレビで知りました。

私：でも俺も家に帰って一息付くと、今日も君達にひどい事言ってしまったなあ - 考える事が。これでもな・・・。

私：登校拒否のことは高校(定時制)のとき級友の女の子から学校に行かなかったこと本人から聞いた事があるけど現実には多いのかな・・・あ。

私：君の家族のひとは、皆心配してたろうなあ - 、特にお母さんは・・・。

K：先生そんなのは、何処にでも有るはなしですよ。

K：僕もその一人で、300日位休みました。

K：特に僕の家は、団地ですから近所の人にいろいろ聞かれて困ってたようです。後でお母さんが言っていました。

私：え・・・嘘を言うな・・・。

私：君のような男が・・・信じられん。

K：中学校の内申書を見てください。

私：俺も君が毎日来ることで、少しは俺も役に立っているんだな。

私：いやあ - 見てないよ・・・。

私：だって俺は、ほかの先生と違って過去の成績なんて気にしないから。

K：お母さん安心してあっちこっち買い物にで歩きますよ。

K：誰のも見てないのですか？

私：だってそんなことしたら、先入観が先に立って公平に人を見られないだろう。

私：ところで、君進学あきらめたのか？

K：先生変わってますね。

K：今のところ・・・。

私：変わってるかなあ - 。

私：君だったら、公立高校だって入れたし勉強も良く出来ると思うよ。

K：だって僕の中学校の先生は、一年生の成績だけで二年生の一学期から相手にしてくれませでしたよ。

K：駄目ですよ、中学校の先生が受けさせてくれませんよ。

私：それは、無いだろう、だって学校の先生は優秀でないと成れないんだぞ。

私：試験ができれば合格するんじゃないのか。

K：先生もいろいろですからねえ - 。

K：先生が駄目といえば、駄目なんです。

私：それはそうと、おまえ未だここへ来てから皆動じゃなかったか？

私：そうか、俺の考えが甘いのか。

K：はいそうです。

私：それだったら君だったら、中学校卒業して直接就職したって良かったかも。

私：何故休まずに来れるのか？

K：あのみまでは、自信ないです。

K：ここは、一日々が区切られているから、明日予定

K：多分続かなかったと思います。

そんなKとの会話から私は少し手ごたえのようなものを感じ取ったのである。少し自信のよなものを感じ始めていた。(中略)

本稿の終にあたって、ここに提言したい。

「職業の差別は、教育現場の意識改革から。」

「人間の生活力は仕事に打ち込む力から生まれるのであって、手段にすぎない職業で差別してはならない。」

「職業人の成績は、仕事にいかにか打ち込めるかであって、所得の多い、少ないではない。」(後略)